



Title	『万葉集』巻四・五〇九・五一〇番歌考： 望郷 表現の獲得
Author(s)	関谷, 由一
Citation	国語国文研究, 151, 14-28
Issue Date	2018-06-11
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/89738">http://hdl.handle.net/2115/89738</a>
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_151_14-28.pdf



[Instructions for use](#)

# 『万葉集』 卷四・五〇九・五一〇番歌考

——〈望郷〉表現の獲得——

関 谷 由 一

## 一 はじめに

旅に出た男が「妹」への思慕を通じて家郷との繋がりを喚起する歌は、現地の景物や地名を詠み込む歌と並んで、万葉の旅の歌の類型とされている。「家郷への思慕をうたうことは、家郷の生命力を招き、それに合うことを祈って、安全な旅を期することであった」とし、萬葉の旅の歌は、大部分、根柢に故郷回帰の願いをこめて操られていて、と見る伊藤博氏の論や、旅する夫と家に残る妻との呪術的な共感関係を喚起することが旅の歌に求められたとする、かつての神野志隆光氏の論などが、その代表的なものといえる。

しかし、異郷の旅人がその存在を求め、共感関係を喚起する必要を感じた相手は、旅の歌で通常うたわれる「妹」だけではないのではないか。旅先から家郷の「妹」に向かって恋の思いを述べるのが旅の歌の様式とされるが、行路死人歌や防人歌においては、「母父」

や「妻」「子」が死者や防人に親しい者としてうたわれることが多く、旅の歌一般と行路死人歌などでは歌の表現の原理が異なっていると、飯田勇氏は指摘する。確かに、旅先で死の危険を意識した時に官人たちが思うのは、「妹」だけではなく、両親や妻子などの家人全体に及ぶと考える方が自然ではある。

無論、このことは、旅の歌の主題が結果的に「妹」を通した〈望郷〉となつて見ると見ると何ら妨げない。ただ、その〈望郷〉なるものに対しては、家郷への絶ち難い思いを抱く者が、家郷を代表する存在としての自己の「家」を想起し、必然的にそこに待つ者としての妻「妹」を恋うに至った、というよりも、「妹」——どのような存在かは後述——への絶ち難い思いを抱く詠歌主体が、自らの状況に即した歌をうたう中で、〈望郷〉と言い得る表現を獲得するに至ったという説明の方が、より適切なのではないか。旅する者が「家」の「妹」を思慕する様式がやや遅れて成立したと思しいことや、本稿が以下で取り上げる、丹比笠麻呂の筑紫へ下る時の歌の

内容などからは、そのように考えられるのである。

## 二 当該歌の和歌史的意義と表現の特徴

丹比真人笠麻呂、筑紫国に下りし時に、作る歌一首（并せて短歌）

臣の女の 櫛笥に乗れる 鏡なす 三津の浜辺に さにつらふ  
紐解き放けず 我妹子に 恋ひつつ居れば 明け闇の 朝霧隠  
り 鳴く鶴の 音のみし泣かゆ 我が恋ふる 千重の一重も  
慰もる 心もありやと 家のあたり 我が立ち見れば 青旗の  
葛城山に たなびける 白雲隠る 天さがる 夷の国辺に 直  
向かふ 淡路を過ぎ 粟島を そがひに見つつ 朝なぎに 水  
手の声呼び 夕なぎに 梶の音しつ 波の上を 行きささぐ  
くみ 岩の間を い行きもとほり 稲日つま 浦廻を過ぎて  
鳥じもの なづさひ行けば 家の島 荒磯の上に うちなびき  
しじに生ひたる なのりそが（栗吉彦） などかも妹に 告らず（采吉）  
来にけむ （四五〇九）

反歌

白たへの 袖解さかへて（袖解更面） 帰り来む 月日を数（本）みて  
行きて来ましを （五一〇）

右の長反歌は反歌の解釈が定まっておらず、その関連で長歌末尾の「告らず」の理解にも問題を残すが、作品全体に対しては、後述する清水克彦氏の論文の影響もあって、「道行的望郷歌」としての評

価が定着しているといつてよい。

作者の丹比笠麻呂は伝未詳であるが、右の他に、持統四年か大宝元年と思われる紀伊行幸時の作を残す（三二八五）。それに和した春日老（三二八六）には、大宝二年の遣唐使であった美努岡麻呂と思われる「三野連」への送別の歌（一六六二）がある。また、遣新羅使人歌群中には当該歌と類似した表現を持つ「物に属きて思ひを発す歌」（一五三六二七～三六二九、以下「属物発思歌」とする）が存在する。以上により、笠麻呂の活動時期は天平八年を下らず、文武朝頃を中心とすると考えられている。また、第一三〇一六句の二重傍線部は、柿本人麻呂が「妻」を亡くした時の泣血哀慟歌（二二〇七）に同一の表現を持ち、人麻呂作歌からの表現の摂取と思われる。よって当該長反歌は、万葉の旅の歌の中では古い部類に属しながらも、人麻呂と同時代か、やや下の時期の作と考えられる。

清水克彦氏は、巻四冒頭から五二〇歌までが万葉前期の作品を配列したものと思しいことから、右のような推察を肯定する。同時に氏は、属物発思歌との類似（傍線部）に加え、第三期の歌人・山部赤人の旅中詠に、「しじに生ひたる」（三三三四）や「直向かふ」（六九四六）といった赤人以前では笠麻呂作以外に例を見ない同一句、さらに赤人の「辛荷の島に過る時」の作（六九四二）に、「淡路の野鳥も過ぎ」「印南つま」「我家を見れば青山のことも見えす白雲も千重になり来ぬ」といった、同一ないし類似の表現の存在（以上、波線部）を指摘し、笠麻呂の当該長歌が、瀬戸内海西航上の羈旅歌に与えた影響の大きさと、その和歌史的意義を強調する。

清水氏はまた、当該長歌の地名が「淡路を過ぎ」、「粟島をそがひ

に見つづ、「稲日つま浦廻を過ぎて」、「家の島」に至るといふように、道行的な表現構造を持っていることを指摘し、これが通過地を取り上げて讃えることで旅路の平安を祈る道行きの伝統を踏襲しつつ、同時に「作者の望郷の心に連なる意を感じうる地名であり、……これを並列することによって、そこに望郷の心を秘めた」ものとなっているとする。次に掲げる属物発思歌との類似度は語句レベルに留まらず、「道行的望郷歌」としての主題を共有しており、その点で「両者の類似度はかなり高い」と見るのである。

物に属きて思ひを発す歌一首（并せて短歌）

朝されば 妹が手に巻く 鏡なす 三津の浜辺に 大船に  
ま 梶しじ貫き 韓国に 渡り行かむと 直向かふ 敏馬をさして  
潮待ちて 水脈引き行けば 沖辺には 白波高み 浦廻より  
漕ぎて渡れば 我妹子に 淡路の島は 夕されば 雲居隠りぬ  
さ夜更けて 行くへを知らに 我が心 明石の浦に 船泊めて  
浮き寝をしつつ わたつみの 沖辺を見れば いざりする 海  
人の娘子は 小舟乗り つららに浮けり 暁の 潮満ち来れば  
葦辺には 鶴鳴き渡る 朝なごに 船出をせむと 船人も 水  
手も声呼び には鳥の なづさひ行けば 家鳥は 雲居に見え  
ぬ 我が思へる 心利くやと 早く来て 見むと思ひて 大船  
を 漕ぎ我が行けば 沖つ波 高く立ち来ぬ よそのみに 見  
つつ過ぎ行き 玉の浦に 船を留めて 浜辺より 浦磯を見つ  
つ 泣く子なす 音のみし泣かゆ 海神の 手巻の玉を 家づ  
とに 妹に遣らむと 拾ひ取り 袖には入れて 返し遣る 使  
ひなければ 持てれども 験をなみと また置きつるかも

反歌二首

(15三六二七)

玉の浦の 沖つ白玉 拾へれど またそ置きつる 見る人をな  
み (三二八二八)

秋さらば 我が船泊てむ 忘れ貝 寄せ来て置けれ 沖つ白波  
(三二八一九)

確かに右の長歌では、序を伴う「鏡なす三津」が提示される所から始まり、「淡路」「家島」という共通する地名や、当該反歌と類似した表現（傍線部）を持ち、「我妹子に淡路」といった「地名に寄せる作者の望郷の思い」を読み取ることができる。

しかし、歌表現における両者の差異も見逃すことができない。その一つは、属物発思歌には、当該反歌に見られない旅先の景物への興味や、それによって心を慰めようとする主体的姿勢（破線部）が顕著なことである。これは、確実な出航後の描写が、全四七句の当該長歌では第二三句「天さがる」以下の二五句に留まるのに対し、全七一句の属物発思歌長歌では第五句「大船に」以下の六六句に及ぶこととも関わり。つまり、当該歌の関心が「葛城山」の向こうの「妹」に収斂するのに対して、属物発思歌は、長い航行の中で的心情の展開をうたうものといえる。

この点と関わり、次の上谷内勉氏の見解が注目される。すなわち、当該長歌では詠まれる地名が「葛城」の次が「淡路」まで飛び、他の旅の歌にしばしば詠まれる「武庫」「敏馬」「大輪田」「明石」といった地名に言及しない。特に「敏馬」は「百船の過ぎて往くべき浜になく」とされ（六一〇六六）、「見ぬ妻」に通じ妻を想起させる

地名である。これは、

明石海峡までは視覚によって難波地方と故郷の山々と直接対峙できるので、これらの風景が視界の内から消えるまで、笠簷は進行方向とは逆の東を向いて立ったまま、「紐解き離けず」、「ねのみし泣き」ながら、葛木山の方角を見つめ、一筋に吾妹子を恋し続けていた。吾妹子に対する一途な恋情を詠い上げるといふこの歌の目的のために、その風景が変わらない限り、その間の通過地名は一切無視し捨象することによって、主題をより鮮明に訴えることができる、……

というように、当該長歌が採用した表現方法の帰結である。それは「吾妹子に対する一途な恋情を詠い上げる」ことを目的としたためのだが、遣新羅使人歌と同様に、旅先で家の「妹」を偲ぶ歌でありながら、なぜこのような違いが生じるのだろうか。

もう一つの相違が、長歌の結句のあり方である。当該長歌では長歌終末が「などかも妹に告らず来にけむ」と、「妹」との過去の別離時への思いに焦点が当てられるのに対し、属物発思歌では、持てれども験をなみとまた置きつるかも」と、白玉を共に見る相手から遠く隔たっている者の現在の感慨がうたわれる点である。そしてこの長歌末尾の感慨の差は、それぞれの直後の反歌の内容の相違と密接に関わる。当該反歌では「行きて来ましを」という後悔がうたわれるのに対し、属物発思歌の第一反歌では、長歌末尾の「玉」を置く内容が繰り返され、第二反歌では転じて「忘れ具」によって「妹」への思いを絶つべきことがうたわれる。属物発思歌で「玉」を「置く」ことがうたわれるのは、平館英子氏が指摘するように、「家郷と

の確かな「別離」に勅命による新羅への使いという役目を違えられない自覚があることをも示している」と説明することができる。それに對し当該歌は、私用の旅であるために、「妹」への思いのみをうたうことが許されたのだろうか。しかし、私用での筑紫下向は考えにくく、また、私用であれば妻の同行も可能であろう。

### 三 当該長反歌の「妹」は自宅で待つ妻か

当該歌における「妹」への関心の収斂、別離時への拘泥は、何を意味するのだろうか。

一般に、万葉の旅の歌において旅先で思慕される相手は、自己の「家」で待つ妻であることが前提とされる。旅先で「妹」⇨妻との呪的共感関係が喚起されることにより、自己の居所⇨家との繋がりが確かなものとなるとされる以上、その「妹」は自宅で同居する女性でなければならぬことになる。

しかしながら、そもそも旅の歌で思慕される「妹」とは、このような意味での「自宅で待つ妻」に限られないのではないか。旅に関わる相聞を集めた卷十二の「羈旅発思」には、

①豊国の企救の浜松 ねもころに なにしか妹に 相言ひそめけむ (三二二〇、人麻呂歌集)

②草枕 旅の悲しく あるなへに 妹を相見て 後恋ひむかも (三二四一)

③かく恋ひむ ものと知りせば 我妹子に 言問はましを 今し悔しも (三二四三)

といった作がある。①については、「妹」と親密になったことを後悔するところからは、その「妹」は豊国に住む女か、都の女だとしても同居の妻ではない。②は「妹」と逢うことよって恋が増すだろうと心配するもので、「旅先の女、おそらくは遊行女婦に逢っている歌」(釈注)であろう。③は都に残して来た「妹」と思しいが、この「妹」が同居の妻だとすると、「妻と別れてこんなに悲しいものとは知らなかったとはおかしい」(小野全注)のであり、「妹」は都に住む女でありながら、一時的な関係であったと思われる。

当該歌の「妹」が自己の「家」で待つ妻とすると、互いが無事である限り帰京の暁には再会が叶うのであり、願うべきは(安全で速やかな帰還)となるはずである。事実、遣新羅使人歌では(秋までの帰還)が願われている。

当該歌では、筑紫への旅が死別同前の永遠の別れとなってしまうことを、表現理解の前提としているのではないか。そうすると、笠麻呂は赦免の当てのない流罪になるのではないから、これは相手との関係が安定した婚姻関係ではないことを意味するだろう。

もともと、そうではなくて、旅そのものよりも別離時への思いに焦点を当てるのは、自宅で待つ妻への思慕が誇張された結果であることと見ることもできなくはない。

しかし、本稿は(誇張)とするよりも、相手との関係の不安定さが背後にあると見る方がよいと考える。次節では、その根拠を長歌の表現から三点指摘する。なお、そのうち三点目は反歌の解釈と連動する。

#### 四 長歌の表現の問題

一点目は、長歌第一(三句の「臣の女の櫛笥に乗れる鏡なす」である。「櫛笥に乗れる」は、「クシゲは櫛を入れる器。ノレルは其の上に鏡が置かれる装置があつたのであらう」(私注)などと考えられている。これは出港地「三津」(御津を導く序となつてゐるが、「御津」が修飾される時は通常、枕詞「大伴の」が冠せられ(集中九例)、例外は当該表現を除くと属物発思歌の「朝されば妹が手に巻く鏡なす」のみである。この二例は共に「鏡なす」を用いることから、「鏡のような」と讚美する意も含まれていよう)(全歌講義)と見る事ができそうである。

しかし、属物発思歌のように単に「妹」の「手に巻く」などの表現も可能だったにもかかわらず、「臣の女の櫛笥に乗れる」という特異な表現が選択されたのはなぜか。この問題を考えるに際しては、「臣の女」という語の表現性を探る必要がある。

原文「臣女」は旧訓「マウトメノ」とあつたが、童蒙抄「宗師案」に「ヲミノメノ」と訓み、万葉考がこれに従つて以来、諸注の多くはこれによつてゐる。なお異説として、「臣女」を「姫」の字の戲書として「タワヤメノ」と解するものが、新考以下、大系までのいくつかの注釈書に見られるが、文字に即して「オミノメノ」と訓むべきだろう。「臣の女」の集中例は他に存在しないが、記紀の歌に「臣のヲトメ」(雄略記・仁徳紀)があり、これは、それぞれ天皇の宮人である「春日の袁杼比売」「桑田の玖賀媛」を指す。ゆえにその意味

は、諸注によって「臣下の女の意で、官女をいう」（釈注）と解されてきた。

この冒頭部の「臣の女」が「望郷の対象」（清水氏）であり、「歌の中の『我妹子』を意識して用いている」（集成）という指摘に従うならば、長反歌の思慕の対象は朝廷に仕える官女ということになり、禁忌を犯した恋すら想像させるかもしれない。集中には、

ぬばたまの 黒髪山の 山菅に 小雨降りしき しくしく思ほゆ  
（11二四五六、寄物陳思・人麻呂歌集）

娘ららが 放りの髪を 木綿の山 雲なたなびき 家のあたり見む  
（7一二四四、羈旅発思）

のような序詞の使用例が散見され、一二四四歌について伊藤博氏が「おとめが放りの髪を結ぶという序の内容は、『家のあたり見む』という心情表現とも浅からずかわって旅情を深め、一首全体の雰囲気を高めることに参与していると読みとらなければならぬ」と指摘しているように、序が対象の姿を具体的に想起させる機能を担う例は多い。

序の内容を過度に実体化してとらえることは慎まなければならず、当該長反歌を官女との禁忌の恋をうたっているとまでは読めないだろう。しかし、「臣の女の」以下の表現には、思慕の対象の女性が登場することの容易でない存在であることを匂わせていることも否定できない。（自宅で待つ妻）が同時に官女として形象されることはあり得ないことではないが、必然性に乏しいのも確かである。無論、これのみでは（自宅で待つ妻）を否定する根拠とはならないが、他の表現から総合的に考えた時に、「臣の女」の造形が生きてくるので

ある。

二点目は、長歌第一一・一二句「鳴く鶴の音のみし泣かゆ」である。これは再会を期する相手を思う文脈としては異様な表現といえる。なぜなら、「音のみ（し）泣く」万葉歌の例は、全三〇例中、一三例が挽歌などで死者を慕う表現としてあり、当該歌を除いたその他の一六例も、故京や自らの若さなどの失われたものを傷むものが三例あり（三三二四、五八九七、八九八）、基本的に別離を前提とする表現となっているからである。残りの一三例も、生者に対する恋情でありつつも、

ひとり寝て 絶えにし紐を ゆゆしみと せむすべ知らに 音

のみしそ泣く （4五一五、中臣東人「阿倍女郎に贈る歌」）

相思はぬ 人をやもとな 白たへの 袖ひつまでに 音のみし

泣かも （4六一四「山口女王、大伴宿禰家持に贈る歌」）

白たへの 袖別るべき 日を近み 心にむせひ 音のみし泣か

ゆ （4六四五、湯原王）

といったように、相手との関係が断ち切られた表現（波線部）を伴うものや、「怨恨歌」など逢えない相手を想う女性詠（4六一九、12三二一八、14三三九〇）、赦免の見通しの立たない流人である中臣宅守と狭野弟上娘子との贈答歌（15三三七三、三七六八、三七七七）、および当該歌の影響が考えられる属物発思歌が一〇例を占める。

ただし、一三例の中には、旅立ち・離別の文脈で用いられる例も三例ある（9一七八〇、13三三三四、17四〇〇八）。しかし、一七八〇・四〇〇八歌は別れる相手への贈歌であって、ここでは自己の悲傷を誇張的に表現する動機が認められ、三三三四歌は単なる離別で

はなく、馬で行かず徒歩で行く夫（恋人）の姿に悲しみを深めたものである。

右の三例も含めて総合的に考えれば、「音のみし泣かゆ」は、平館氏も指摘するように「主として死別、またそれに近い生別において用いられる強い表現<sup>(13)</sup>」といえる。これと、第二三―一六句の「我が恋ふる千重の一重も慰もる心もありやと」が、「妻」の死をうたう泣血哀慟歌と同一表現であることを考え合わせると、「音のみし泣かゆ」からは、出発の時点で再び逢うことへの絶望すら読み取られる。生きて帰れぬ旅に出るといふ状況ではないのに、なぜこのような表現を選択するのか。旅の安全と無事な再会を予祝するのであれば、むしろ避けるべき言い方であろう。

なお、「鳴く鶴の音のみし泣かゆ」詠歌主体は、「妹」の「家のあたり」を「我が立ち見」るのだが、そこにある「葛城山」は「たなびける白雲隠る」状態で、望見により心を慰めることが許されない。この「家のあたり」は、いわゆる〈国見の望郷表現〉であり、鉄野昌弘氏が指摘するように「『あたりを見よう』というのは、遠い距離を越えて、最低限の繋がりを確保しようとする」もので、「『あたりを見ず（が見えず）』というのは、その繋がりがすら失ってしまう悲しみを述べる<sup>(14)</sup>」ものといえる。ただし、集中の「家のあたり」（「妹のあたり」）は多くが実際に「妹」などの居住する地点を見るものであるのに対し、

燈火の 明石大門に 入らむ日や 漕ぎ別れなむ 家のあたり  
見ず<sup>15</sup>

（3二五四、柿本人麻呂「羈旅歌八首」）  
といった例では、海上から都のある方向が「家のあたり」と表現さ

れている（他に15三六〇八歌）。当該歌もこれらと同様に、「家は大和の京にあるのであるから、家の方向といふ程の意を、具体的にしようとして狭く云つたもの」（窪田評釈）と考えるべきだろう。すなわち、都にある自己の「家」や、「妹」の住む「家」を包括して大和方面を大きくとらえた表現といえる。

このように当該長歌は、「家のあたり」を見納めることすら許されず、後ろ髪を引かれる思いで「天さがる夷の国辺」に向かい、「直向かふ淡路」を過ぎ、「粟島」を「そがひに見つつ」、朝夕、水手の声と梶の音を聞きながら、波の上を難渋しながら行き、ナビツマ伝説に名高い「稲日つま」をも過ぎて、「家のあたり」を想起させる「家の島」を見た時、そこにびっしりと生える「なのりそ」を見て「なのりそ」が「妹」に告らず来にけむ」とうたい納める。

この結句の理解が問題であり、これを反歌と関わらせて解する時、「妹」が自己の「家」で待つ妻とは見なしがたい根拠の三点目となる。ここは原文「不告来二計謀」とあり、諸人間の異同はない。訓みは、旧訓から代匠記まで「ツゲズキニケム」とあつたのを、童蒙抄が「ノラズキニケム」と改めてから、諸注これに従っている。なお、「なのりそが」を「なのりそが」の「な」に懸かるものとして、「不告」を「いはず」と訓む<sup>(16)</sup>もある。

「告」の字は「ノル」とも「ツゲ」「イフ」とも訓み得るものであるが、「ノラズ」と訓む根拠は、前二句の「なのりそが（莫告我）などこも妹に」を導くためである。集中の用例を見ても、「なのりそ」が序として用いられる六例は、五例が「名はノル」を導くものである。例外として「名（惜しみ）」を導くもの（6九四六）があるが、



天皇が衣通郎姫に「是の歌、他人にな聆かせそ」と言ったことが「ナノリソ」の起源となったという説話（『日本書紀』允恭天皇十一年三月）からも、「ナノリソ」と「ノル」との関連の強さは明らかであり、「名（惜しみ）」を導く一例もそこからの連想と考えるべきであろう。

ここを「ノラズ」と訓むとして、その解釈が問題となる。「ノル」は「ツグ・イフ・カタル・トフなどの語と違つて」「本来呪力を持つた発言であつたらしい」ゆえに、「人の名を言うときや、うらないに關するものが大部分である」とされる（『時代別国語大辞典 上代編』）。

当該長歌の「なども妹に告らず来にけむ」について、諸注の解釈・訳は区々である。

我つくしにゆくとも、いつは帰来んなど委告知せ、よく契置て来へき物を、さもいはてきたるを悔やむ儀なるへし（拾穂抄）  
つけすとは、今つくしへ出たつとつけぬをくゆるなり。

旅のさまを、なども妹に告らず来にけんとなり。（攷証）  
この旅のことを妹に告らずに来たことであらうか。

どうして恋しい妹に、ゆつくり別れの言葉をも云わずに出かけて来てしまったのであろう。（窪田評釈）  
（大系）

なんで妻にわけも告り聞かせずに来てしまったのであろう。（木下全注）

右に掲げた諸注では、傍線部が「告らず」の内容となつている。当該長歌の中では何を「告らず」であつたのか、その内容が一切語

られていないため、諸注の解釈が分かれるのである。なお、これに關連して、木下全注は、同じ巻の人麻呂歌集歌である、

玉衣の さゝるしづみ 家の妹に 物言はず来にて 思ひか  
ねつも（4五〇三）

に対し、「この物言フは、このあとの『なども妹に 告らず来にけむ』（五〇九）の告ルと同じく、懇ろに事情を告げ語らうことをいうのであろう」と注する。

しかし、代表的なテキストである瑞本とおうふう本とで共通して「ノル」と訓む三八例を見ると、「名」をノルものが二八例の他は、「国」「家」「心」をノル例が各一例（9一八〇〇、13三三三六、14三四二五）、占いに出る意が四例（2一〇九、11二五〇六、11二六一三、13三三一八）、呪言をノル例が三例（7一三〇二、7一三〇三、7一三一一八）であり、ノルは重要な発言に用いられることが多いことが確認できる。すなわち、容易に人に知られてはならない「名」や「心」、呪言、占いに出る意のものなどである。これらを「物言ふ」のような特定の要件に限定されない例と同列に扱ふことはできないのではないか。「名」「心」がそうであるように、占いの例でも、石川郎女と寝たという事実（一〇九）、「妹は相寄らむ」という予言（二五〇六）、夫の帰りが何時かというもの（二六一三・三三二一八）が期待されておき、ノルは明確で限定された内容を伝える場合の表現といえる。

これに対し、木下全注が当該箇所と同様に解すべきとする「物言はず来にて」（4五〇三）では、言フに「物事を婉曲にそれと明示しないという」（『時代別国語大辞典 上代編』）用法であるモノがつく

ことで、特定の用件に限定されない様々な睦び言を「語り合う」意味になっている。同様の「物言はず来」は他に三例ある(14三四八一、14三五二八、20四三三七)。さらに、別れの状況での言フにモノが上接しない時は、

草枕 旅に久しく あらめやと 妹に言ひしを 年の経ぬらく  
(15三七一九、遣新羅使人)

防人に 立たむ騒きに 家の妹が 業るべきことを 言はず来  
ぬかも (20四三六四、防人・若舍人部廣足)

の傍線部のように、言フ内容が具体的に示されている。

当該長歌のノルも何らかの限定された具体的な内容で、かつ「妹」に伝えなかつたことを激しく後悔するような重要なものであつたと考えざるを得ないだろう。

## 五 反歌の理解

当該長歌でノルことができなかったのは、拾穂抄(ツグと訓むものであるが)のいう「いつは帰来んなど委告知せ、よく契置く」ことであり、それが反歌で明示されているのではないだろうか。つまり、反歌の「帰り来む月日」を「帰つて来る日は何時」(大系)と解釈し、それが長歌での「告らず」の内容であつたと見るのである。これ以外に、長短歌中に限定された具体的内容といふべきものは見当たらない。

ところで、反歌の解釈をめぐっては、まず、第二句「袖解きかへて」(原文「袖解更而」)が問題となる。通説ではこれを「諸共にかへ

すなり」(代匠記(初)の意とし、「袖解き交へて」の借訓表記とみなすのだが、そうすると、「袖」は通例では「差し交ふ」ものであるのに、ここは「解き交ふ」となっていることが不審となる(「紐」ならば「解き交ふ」となることから、「袖」を「紐」の誤字と見る略解などの説もある)。

そこで、ここは笠麻呂の「思案の外の情痴の世界の表現」(注釈)と見て、「袖交へし」(2一九五)と「帯解きかへて」(3四三二)、「紐解き交わし」(10二〇九〇)などの混線とする説明がなされる(注釈、木下全注等)。確かに、「紐解き放け」とあるべきところを「紐解き開け」とする例(11二四〇五)もあり、そのような推測は不可能ではない。

しかし、「更」の基本的な字義「改也」(説文解字)に即して正訓で読むことはできないのだろうか。坂本信幸氏は「勝鹿の真間の娘子が墓に過る時に、山部宿祢赤人が作る歌」の反歌である、

古に ありけむ人の 倭文機の 帯解きかへて(帯解替而)  
…… (3四三二)

の第四句について、「解き交ふ」の借訓表記とする通説では、虫麻呂の真間娘子(9一八〇七、一八〇八)とは異なり、娘子が他の男と寝たことになり、伝説内容に重大な相違が生じてしまうことを批判する。集中で「替」は、「年替左右」(2一八〇)、「其緒者替而」(7一三二六)のように、全て正訓字表記で用いられており、「更」についても、「音毛不更」(3三三二)、「生更生而」(19四二二)のように、正訓字表記で用いられるものが、当該反歌を除いた九例中八例であつて、例外は「玉手指更」(8一五二〇)のみであるとする。

このことを重視すれば、四三二歌については、全註釈に「古びた帯を解いて、倭文幡の帯に解き替えて」とあるのに従って「(男が)今までの粗末な倭文機の帯を解き、新しい帯に取り替えて」と解する<sup>(17)</sup>か、もしくは「妻と貞節の誓いのもとに結び合った帯を自ら解き替えて」と解する(坂本氏)こととなる。

当該箇所も、「別の衣に著換えてである。妻のもとに行つてさつぱりとした衣服に著換えて」(全註釈)と見るべきではないか。集中に「解き洗ひ衣」(7-131-14)、「衣解き洗ひ」(12-330-9)といった表現があるように、当時は洗濯の際には、形崩れを防ぐために縫い目を解いて洗うのが普通であった<sup>(18)</sup>。こゝは、官服の長い筒袖を縫い目から外して解いて交換することをうたつているのであろう。ただし、後述する理由から、全註釈のように「妻のもと」に到着後の行為と見るのではなく、「妹」のもとへ行く前にする行為と見る。

下三句を中心とする全体についても解釈が分かれている。代匠記(初)が「二句にてきりて心得へし」として以降、全集以前の諸注は「白袴の袖をたがいに解きかわして、帰つて来る日は何時と数え合つた上で出かけてくるのだつたのに。(それをせずには別れて来てしまった。)(大系)と解してきた(近年では全歌講義がこの説に立つ)。これをA説とする。

これに対し全集は、「婦り来む」を「都の妻に逢つてから現在歌を詠んでいる地点まで引き返して来よう」の意で解し、ここで句切れとする。また「月日を数みて」を「筑紫下向に要する日程(筑前まで下り十四日)をつめて遅れないように努めること」とし、「行きて来ましを」を「この行キテ来は妻の家に於て『来』、現在の地点に

戻つてくることをさす」と解する。これをB説とする。

近年の諸注はB説に立つものが多いが、その理由は、A説では「行きて」が意味を成さなくなる(木下全注)点にある。確かに、「行きて来」の用例は当該箇所以外に、

竜の馬も 今も得てしか あをによし 奈良の都に 行きて来む ため (580六、大伴旅人)

難波道を 行きて来までと 我妹子が 付けし紐が緒 絶えにけるかも (204四〇四、防人・上毛野牛甘)

の二例があり、明らかに「行つて帰つて来る」意のこれらを傍証とするならば、B説のように「妹」の家に行きそして現在地まで帰つて来る」と解するのが自然であろう。

しかし、B説は「月日を数みて」の解釈に問題がある。「月日を数む」は他に三例ある。

① 春花の うつろふまでに 相見ねば 月日数みつつ 妹待つらむそ (17三九八二、大伴家持「三月二十日夜裏に忽ちに恋情を起こして作る」)

② ……朝寝髪 掻きも梳らず 出でて来し 月日数みつつ 嘆くらむ…… (18四一〇一、大伴家持「京の家に贈らむ為に真珠を願ふ歌」)

③ ……たちねの 母が目離れて 若草の 妻をまます あらたまの 月日数みつつ 葦が散る 難波の三津に 大船にま権しじ貫き…… (20四三三一、大伴家持「追ひて防人が別れを悲しぶる心を痛みて作る歌」)

①・②は送り出した家人が、③は旅人自身が、数ヶ月から数年の間、

帰還の時を「数み」ながら帰日を待ちわびる文脈で用いられている。B説のように、航行の途中での一時帰宅といった短期間の日数(片道数日以内であろう)について、「月日を数みて」と表現したとは考えにくいのではないか。

「行きて来」の解釈はB説の(《行つて戻つて来る》の意味を生かしつつ、句切れと「月日」の解釈はA説に従い、《難波から出航する前に、袖を解き替えた上で、筑紫から帰ってくる月日を数え、(それを知らせるために)都の妹の家に行つて(難波に)戻つて来ればよかつた》と理解すべきではないだろうか。末尾で「妹」に(《告らないまま出航した》ことへの後悔に結実する長歌に対して、その内容を具体的に述べたと見るのである。すなわち、長歌前半部で「音のみし泣かゆ」と、挽歌を思わせる表現によつて歌の享受者の関心を引きつけつつ、末尾と反歌で種明かしがされるといふ趣向である。

## 六 当該歌における「妹」との別離の意味

送り出す側が帰還の時を知らされていない例として、当該反歌とよく似た表現をとる次の歌が参考になる。

草枕 旅去にし君が 帰り来む 月日を知らむ すべの知らなく  
〈(17三九三七「平群氏女郎、越中守大伴宿禰家持に贈る歌十  
二首」)

小野寺静子氏が指摘するように、この前歌(三九三六)の「君を遣りつつ」によれば、「二人は全く絶交状態だったわけではない」と考えられるが、この歌からは「帰つて来る月日を知る方法がなく親

密な仲というほどでもないこと<sup>(19)</sup>がうかがえる。

前節までで述べた理解に立つと、当該反歌ではこの平群氏女郎作とは逆に、男の側から「帰り来む月日」を知らせたかったという嘆きがあつたわれていることになる。そしてそれが、長歌末尾の「なかも妹に告らず来にけむ」の具体的内容とする、当該長反歌は、平群女郎と同様に、安定的な関係を築けなかつた相手への思慕をうたうものになろう。

では本当に、帰還の時を知らないことが、「親密な仲」ではないことを意味するといえるのか。旅の歌で《帰りの時がわからず待ち続ける》とうたうものとしては、他に次のような例がある。

①秋風は、日に異に吹きぬ 我妹子は いつとか我を 斎ひ待  
つらむ (三六五九)  
②竹敷の 玉藻なびかし 漕ぎ出なむ 君がみ船を いつとか  
待たむ (三七〇五)

③逢はむ日を その日と知らず 常闇に いづれの日まで 我  
恋ひ居らむ (三三四一)  
④味真野に 宿れる君が 帰り来む 時の迎へを いつとか待  
たむ (三七七〇)

右の四首は巻十五の例である。①は、遣新羅使人の歌であるが、秋までに帰ることが絶望的になつた事実(波線部)が、「いつとか……待たむ」につながっている。②は、自宅で待つ妻ではない対馬娘子の作である。③は中臣宅守の、④は狭野弟上娘子の作で、破線部に「逢はむ日をその日と知らず」とあるように、中臣宅守の流罪がいつ許されるのかが見通せない状況を前提とする。確かに「いつ

とか……待たむ」には、右の①②④以外に、送り出した女性が男性を思う例が三例あるが(12三一八六、13三二五二、13三三三二)、これらがどのような立場の女性なのかは明らかでない。

右の「いつとか……待たむ」の六例が旅と関わるのに対し、それ以外の「いつとか……待たむ」に次の四首がある。

⑤山のはに いさよふ月を 待つとも 我が待ち居らむ 夜  
はふけにつつ (7一〇八四、詠月)

⑥朝霞 春日の暮れば 木の間より うつろふ月を 待つとも  
待たむ (10一八七六、人麻呂歌集、詠月)

⑦夕占にも 占にも告れる 今夜だに 来まさぬ君を 待つとも  
か待たむ (11二六一三、正述心緒)

⑧玉杵の 道に行き逢ひて よそ目にも 見れば良き兒を 待つとも  
つとか待たむ (12二九四六、正述心緒)

⑤は夜が更けており、⑥は霞がかかっている、月を見ることが十分に叶わず、その見通しもない。⑦は占いによれば来るはずの今夜さえ来ない、⑧は道ですれ違っただけ、という状況である。

以上により、「いつとか待たむ」は「期待薄の場合に言うことが多い」(新編全集・⑥)ことがわかる。つまり、旅人の帰日を知らない状況をうたうのは、旅人と自己との関係性の薄さへの嘆きなのである。当該長歌末尾で、帰還の月日を伝えなかったことの後悔が前面に出るのは、もともと「妹」の居所が自分の家ではなく、長期の方向がそのまま関係の断絶を意味するような関係であったということになる。

旧注の中には断片的ながら「忍タル妻ナトニ、カクト云ヒ置ヘキ

由ノナカリケルナルヘシ」(代匠記(精))、「か、る大事の門出に我妹子に告別せぬといふことは、聊か腑に落ちない。想ふにこの我妹子は同棲者ではあるまい」(金子評釈)、「同棲してゐる妻ではないからである」(注釈)といった指摘があった。これらは近年の諸注には受け継がれていないものであるが、今改めて顧みられるべき見識であろう。このように見ることで、長歌冒頭の「臣の女」が官女のよくな容易に逢えない相手を思わせることや、「鳴く鶴の音のみし泣かゆ」という再会を絶望する表現が使われることもよく整合するからである。

## 七 おわりに

清水克彦氏が、当該歌の地名に関して「作者の望郷の心に連なる意を感じうる」と見、作品全体を「道行的望郷歌」と位置付けた点は、今日でも肯されるものである。しかし、この〈望郷〉は、旅の歌について伝統的にイメージされてきたような、自分の「家」に残して来た妻を通してのものではない。この「妹」とは、「臣の女」であるゆえに逢うことが難しく、家持と平群女郎の関係同様に儚い縁でしかなかった女なのであり、それゆえに詠歌主体の願いは無事な帰還ではなく、二度と逢えない「妹」を偲ぶために葛城山を見続けることになるのである。長歌末尾と反歌で、残して来た女に「帰り来む月日」を知らせなかったことへの後悔が全面に出るのも、そのためと考えて納得がゆく。

第一節で述べたように、人麻呂より前には旅先で残して来た

「妹」を恋う歌はないとされる。実は、人麻呂関係歌でもそのような歌は多くない(9一六八八〜九〇、9一六九六〜九八、12三二二八)。むしろ人麻呂関係で目立つのは、「石見相聞歌」(2一三二〜一三九)や、紀伊国での作歌(4四九六〜四九九、9一七九六〜一七九九)、前掲の羈旅発思歌(三一一〇)などの、旅先の女性との恋をうたうものである。

当該長歌は、人麻呂の「泣血哀慟歌」の影響が認められると同時に、清水氏が指摘するように、山部赤人や遣新羅使人等の作歌にインスピレーションを与えたと思しい。すなわち、当該歌において二度と逢えない「妹」を偲ぶ中で獲得された〈望郷〉表現が、その後の旅の歌の様式として定着していった過程が想定されるのである。稿者がこれまで行ってきたように、万葉の旅の歌の根底に呪術性や「身の安全」といった実用的目的を想定する旧説を否定するのであれば、旅の歌の様式が「妹」を思慕するものとなっている理由を説明する必要がある。本稿ではその一つの回答として、万葉和歌史における〈望郷〉表現の獲得、という視点の提示を試みた。

\*万葉集の引用は、『新編日本古典文学全集 万葉集』(小学館)によったが、一部私に改めた。必要に応じて原文を括弧内に小字で示した。注釈書の略称は通行のものに従った。

\*本稿で引用・言及した万葉集の注釈書の略称は以下の通り(出版社・出版年等は省略)。

拾穂抄——北村季吟『萬葉拾穂抄』／代匠記(初／精)——契沖『萬

葉代匠記(初稿本／精撰本)／童蒙抄——荷田春満『萬葉集童蒙抄』／万葉考——賀茂真淵『萬葉考』／略解——橘千蔭『萬葉集略解』／攷証——岸本由豆流『萬葉集攷証』／新考——井上通泰『萬葉集新考』／窪田評釈——窪田空穂『萬葉集評釋』／私注——土屋文明『萬葉集私注(新訂版)』／全註釈——武田祐吉『萬葉集全註釋(増訂版)』／大系——高木市之助・五味智英・大野晋『日本古典文学大系 萬葉集』／注釈——澤瀉久孝『萬葉集注釈』／全集——小島憲之・木下正俊・佐竹昭広『日本古典文学全集 萬葉集』／集成——青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎『新潮日本古典集成 萬葉集』／木下全注——木下正俊『萬葉集全注』卷四／釈注——伊藤博『萬葉集釋注』／新大系——佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之『新日本古典文学大系 萬葉集』／小野全注——小野寛『萬葉集全注』卷十二／全歌講義——阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』

### 【注】

- (1) 伊藤博「伝説歌の形成」(『萬葉集の歌人と作品』下、塙書房、一九七五年。初出一九六四年三月) 八一頁。
- (2) 伊藤博「家」と「旅」(『萬葉のいのち』塙新書、一九八三年、初出一九七九年二月) 一四〇頁。
- (3) 神野志隆光「行路死人歌の周辺」(『柿本人麻呂研究』塙書房、一九九二年。初出一九七三年二月)。
- (4) 飯田勇『万葉集』の羈旅歌——防人歌を論ずるために——

- (4) 『人文学報』(首都大学東京都市教養学部人文・社会系)『四三二、二〇一〇年三月』三二〇頁。
- (5) 阿蘇瑞枝氏は、第一期(壬申の乱以前)の旅の歌において、旅人が家郷に残した「妹」を偲ぶ歌は、人麻呂以降の作かとされる軍王歌(一五、六)を除くと皆無であり、基本的に著名な土地・風物に対する憧憬や感動をうたう作が優位を占めていることを指摘する(『万葉集羈旅歌の世界』(二)——初期万葉から奈良遷都まで——)(『万葉和歌史論考』笠間書院、一九九二年。初出一九八〇年四月。一六六―一六八頁)。第一期から見られるのは、「留守歌」と呼ばれる残る者がうたう作である(一四、9―一六六等)。
- (6) 井上通泰『丹比笠麻呂』(『万葉集追攷』岩波書店、一九三八年)。
- (7) 清水克彦『丹比笠麻呂の道行的望郷歌——赤人作歌との關係を中心に——』(『萬葉論集 第二』桜楓社、一九八〇年。初出一九七八年六月)。
- (8) 清水氏注(7)前掲論文・八四―八六頁。
- (9) 上谷内勉『『万葉集』卷四・五〇九番歌の地名』(『松学舎大学人文論叢』六八、二〇〇二年一月。一六―一七頁)。
- (10) 平舘英子『属物発思歌——遺新羅使人等歌群中の位置——』(『萬葉悲別歌の意匠』塙書房、二〇一五年。初出二〇〇六年六月)二二二―二三三頁。
- (11) 中西進氏は、当該長反歌を含めた巻四の前半部が主として「官人と官女の恋」の歌によって組織されているとする(『官女の恋』(『万葉史の研究』桜楓社、一九六八年。初出一九六四年六月)。
- (12) 伊藤博『序詞の表現性』(『万葉集の表現と方法下』塙書房、一九七六年)二五五頁。
- (13) 平舘氏注(10)前掲論文・二二二頁。
- (14) 鉄野昌弘『国見的望郷歌』(『国語学』(『国語学』(東京女子大学)八五、一九九六年三月)一〇頁)。
- (15) 鶴久『万葉集における語・告・謂・言の訓——表記意識と用字法との関連において——』(『語文研究』(九州大学)四・五、一九五六年一〇月)九二頁。
- (16) 坂本信幸『倭文機の帯解き替えて——山部赤人の真間娘子の歌の解釈をめぐって——』(『叙説』二二、一九九五年一月)。
- (17) 神野富一『万葉集の「妻問ひ」——真間娘子・菟原処女にふれて——』(『国語国文』八五―四、二〇一六年四月)二二頁)。
- 同様の解釈としては、村瀬憲夫氏によるものがある(『倭文機の帯解きかへて』の解釈『解釈』四〇六、一九九四年六月)。
- (18) 小川安朗『万葉集の服飾文化(下)』(六興出版、一九八六年)三七頁)。
- (19) 小野寺静子『家持と恋歌』(塙選書、二〇一三年)八一頁)。
- (20) 拙稿「家」と「旅」再考——山上憶良「日本挽歌」の「家」をめぐって——(『国語国文研究』一四〇、二〇一一年九月)、同「羈旅」歌考——大伴御膳等々の「悲傷羈旅」歌の場合

——」（『美夫君志』八六、二〇一三年三月）、同「柿本人麻呂  
「羈旅歌八首」の位置——（「羈旅」主題化の始発——」（『国語  
国文研究』一四四、二〇一三年二月）。

（せきや ゆいち・北海道大学大学院文学研究科共同研究員）